

令和6年度

奈良教育大学 ESD 学生活動報告書



2025年3月

奈良教育大学 ESD・SDGs センター

今年もしっかりやれました

奈良教育大学ESD・SDGsセンター長 中澤 静男



私がユネスコクラブを立ち上げたのは、2011年7月29日です。なぜ、こんなにはっきり覚えているかというところ、「ESDと世界遺産」の授業の途中で、ユネスコクラブをつくりたいと思っている、と少し言ったようなのです。7月29日が授業の最終日でした。「これでESDと世界遺産」は終わりです。半年間受講してくれてありがとう。」と、笑顔で挨拶したところ、1人の女子学生が教卓までスタスタやってきて、「先生、ユネスコクラブをつくるって言ってたけど、いつつくるんですか!」と、

詰め寄せられ、苦しまぎれに「今日、つくります。3時に研究室にきてください。」3時にやってきたのは、その女子学生の他に教職大学院生が3人です。これがプレ会合で、正式には、私の知り合いがやっている「かなかな」という喫茶店で集会を開いたところ、学部生が2人来てくれたので、学部生3名（1回生）と教職大学院生3名（M1）と加藤先生で、ユネスコクラブが発足したのです。ユネスコクラブには2つの目標があります。ESDが指導できる力量形成とESDを楽しく探究することです。

新宮君、後藤田君、糸さん、堀口君、谷垣君、仲村さん（仲村さんの2年目あたりからコロナ禍）、狗飼さん、佐藤さん、川田君、苗代君、吉岡さんなどなど、これまでクラブの代表としてみんなの先頭に立ってがんばってくれました。感謝しかありません。

この14年間で大きく変化したのは、部員数の拡大だけではありません。発足当初は十津川村道普請やESD教材開発旅行、「私の好きな奈良」、ESD子どもキャンプと、教員側が関わる活動が多かったのですが、最近では学生主体の活動になりました。コロナ禍も乗り越え、よくやってきたなあと感じています。

そして今年度です。代表の吉岡さん、副代表の澤井さん・木幡さんが苗代君のサポートを受けながらがんばってみんなをまとめてくれました。

奈良市などの小中学校の野外活動支援は18回ありました。私はほとんど覚えておらず、苗代君に電話で確認したところ、奈良市立西大寺北小、伏見小、富雄南小、平城小、東市小、登美ヶ丘小、富雄北小、三碓小、左京小、済美小、都跡小、一条中学校。その他に大和郡山市立片桐西小、安堵町立安堵小、キッズのびのびクラブ、Seibigacha、奈良市スポーツ少年団、附属小で、野外活動支援に関わらせていただきました。その他、奈良女子高等学校の防災教育、奈良女子附属幼稚園の森の幼稚園、伏見小+奈良女子大学と連携したおぎの美術館、くらしのブンカサイ in 生駒、キッズエコクラブ、アースデイ、アクサユネスコやユースフォーラムでの活動報告、3月27日には国連大学での活動報告も依頼されています。ここまで大きく、立派なクラブになるとは思ってもみませんでした。皆さん、本当にありがとう。次年度は安井さん、間宮さん、下田さん、玉井さんへと代表のバトンが引き継がれました。持続可能な社会の実現を目指して、みんなで協働してくれるものと確信しています。

目次

はじめに.....	1
目次.....	2
奈良市立西大寺北小学校野外活動支援.....	3
奈良市立左京小学校野外活動支援.....	4
奈良市立富雄北小学校野外活動支援.....	4
奈良市立三碓小学校野外活動支援.....	5
奈良市立東市小学校野外活動支援.....	6
奈良市立平城小学校野外活動支援.....	7
奈良市立済美小学校野外活動支援.....	8
奈良市立都跡小学校野外活動支援.....	9
奈良市立富雄南小学校野外活動支援.....	10
奈良市立安堵小学校野外活動支援.....	11
一条高校附属中学校キャンプ in 滋賀.....	11
第1回春日山原始林フィールドワーク.....	12
第3回春日山原始林フィールドワーク.....	13
第6回春日山原始林フィールドワーク.....	14
アースデイ奈良に参加して.....	15
東大寺寺子屋支援.....	16
第1回万葉文化館授業づくりセミナー.....	17
2025 大阪・関西万博開幕1年前イベント NARA YOUTH EXPO.....	17
こどもおん祭 ボランティア活動.....	18
学ぼう！飛鳥の地蔵盆2024.....	19
富雄公民館環境企画.....	20
奈良市立都跡中学校校外学習.....	21
第5回ならやまオープンセミナーESD・SDGs 連続オンラインセミナー.....	21
あつまれECOキッズ！！.....	22
第1回 森と水の源流館授業づくりセミナー.....	23
第1回奈良ESD連続セミナー.....	24
第2回奈良ESD連続セミナー.....	26
第3回奈良ESD連続セミナー.....	27
第4回奈良ESD連続セミナー.....	28
第5回奈良ESD連続セミナー.....	30
第6回奈良ESD連続セミナー.....	31
第7回奈良ESD連続セミナー.....	33
第8回奈良ESD連続セミナー.....	35
第9回奈良ESD連続セミナー.....	36
第10回奈良ESD連続セミナー.....	38
第11回奈良ESD連続セミナー.....	39
ESDとしての教科教育実践.....	40
成果発表会 子どもフォーラム.....	41
編集後記.....	42

奈良市立西大寺北小学校野外活動支援

◆ 概要

キャンドルファイヤーのお手伝い、生徒たちのスタンプの盛り上げ

(英語教育専修2回生 上江 佳加)

◆ 自分で考えたこと

私は今回が初めての野外活動支援だった。支援日当日はあいにくの雨でキャンドルファイヤーとなった。子どもたちがキャンドルファイヤーをしている様子を初めてみて思ったことは、子どもたち一人一人がとても生き生きしていてとても楽しそうであったことだ。後半、疲れてきたのか活動にあまり積極的に参加できていない児童が私の近くにいた。その時に、「一緒にやろう！」のような声をかけたことで、その児童も徐々に活動に参加してくれるようになった。このことから、周囲を見渡し児童の参加している様子を観察し、気になる児童がいれば声かけをすることの大切さを認識することができた。

(家庭科教育専修2回生 光延 ひなた)

◆ 自分で考えたこと

今回は私にとって二回目の野外活動支援だった。前は少し小雨だったが、外でキャンプファイヤーを行うことができた。しかし、今回は記録的な大雨で、キャンドルファイヤーでの実施になった。どのような形での実施になるのか少し不安に思っていたが、児童たちはとても元気で、キャンプファイヤー系の児童たちが、とてもしっかりとっていて、積極的に盛り上げようとしてくれていたし、一番笑顔で楽しんでいた印象だった。そして、火を分けてもらうところで、三人の児童が、それぞれの火の名前を言い、協力することを誓うようなことを言っていて、まだ五年生だと思っていたが、とても頼もしいなと思い感動した。また、キャンドルファイヤーを行う前に少し児童たちと関わる機会もあったが、そこで話している中で、表現が苦手そうだなと感じる子たちが数名いた。しかし、スタンプ内ではしっかりと自分の役目を果たし、とても楽しんでいる様子を見ることができて、とても元気をもらうことができた。そして、児童たちのスタンプの合間にユネスコクラブのスタンプを行い、みんな楽しんでくれてとても嬉しかったし、それ以降少し話しかけて、一緒に楽しむことができてとても楽しかったなと思える活動だった。

(英語教育専修2回生 上江 佳加)

奈良市立左京小学校野外活動支援

◆ 概要

奈良市立青少年野外活動センターにて、左京小学校 5 年生の野外活動支援に参加した。夕方に現地に着き、キャンプファイヤーの支援を行った。主に、キャンプファイヤーで子どもたちとスタンプを楽しんだり、子どもたちがキャンプファイヤーの火に近づきすぎないように見守ることが仕事だった。

◆ 自分で考えたこと

私は今回初めて野外活動に参加して、子どもたちとのコミュニケーションの難しさを知った。自分で想像していたよりも、話しかけて会話に入るのが難しいと感じた。また、キャンプファイヤー中、特定の子どものしか会話できなかつたことも反省すべき点だったと思う。次からは、スタンプの時に場所を移動したりして、たくさんの子どものコミュニケーションを取れるようにしたい。ただ、火に近づきすぎている子どもに声をかけたり、進化ジャンケンなどで子どもと一緒に楽しめたりしたのは、良かった点として挙げられると思う。今回の反省や学びを次回の活動に活かせるようにしたい。

(教育学専修 1 回生 宮崎 愛未)

奈良市立富雄北小学校野外活動支援

◆ 概要

野外炊飯の補助及び指導、キャンプファイヤーの補助、安全管理

◆ 自分で考えたこと

私は今回の野外活動支援に参加して、児童への声掛けの大切さを学んだ。キャンプファイヤー時、火に近づく児童に対して、危ないから離れるように声掛けをした。また、静かにしなければならない場面で、喋らないように注意をした。全体が賑わって教師の指示が通りにくい中で、児童の安全を守り、活動をより良いものにするために、私たちの声掛けは重要な役割を果たしていると学んだ。今後の活動でも、児童への声掛けを大切にしていきたい。

(家庭科教育専修 2 回生 安井 優美)

◆ 自分で考えたこと

今回の野活では見守ることの大切さを学んだ。到着したとき、子どもたちはちょうど夕食を食べ始めるところで、予定にはなかつた飯盒炊爨の手伝いをすることができた。スケジュールがおしているとのことで片付けの手伝いを申し出たが、「洗いにくいことを学ぶことが大切」と先生に言われ、危うく子どもたちの学びの機会を奪うところだったと気付かされた。思い通りでなくても見守ることができる余裕こそ、子どもたちの成長を促すのだと感じた。

(音楽教育専修 3 回生 藤原 萌)

奈良市立三碓小学校野外活動支援

◆ 概要

6月5日に三碓小学校の野外活動支援に参加した。当日は野外炊飯が終了した時間からお風呂への誘導や布団の準備、キャンプファイヤーの支援を行った。事前指導も行い、スタンプの指導や児童の話し合いの補助などを行った。

(国語教育専修3回生 吉岡 優来)

◆ 自分で考えたこと

今回の野外活動支援を通して、児童の主体性や集団としてまとまる力をつけるためには、意識付けをすることが必要であると学んだ。100人を超える集団の中で、教師が前に立てば「静かにしよう」と児童からの声掛けがあった。また、部屋に入ってから活動ではリーダーが指示をだし、それを皆で聞いて実行することが当たり前のように出来ていた。それらはキャンプファイヤーでも生かされていた。そのような集団になるためには、日頃から児童自身に判断をさせ個人・集団としてすべき行動を考えさせることが重要ではないかと感じた。また、児童と話している中で、自然に触れたことや野外炊飯で自分たちで火を起こして食事を作った事が楽しかったといった感想を聞き、非日常を味わっていることが分かった。そこからよりESDの学びを深めるために電気を使わない生活を体験することの大切さや自然への愛着などを意識していきたいと考える。

(国語教育専修3回生 吉岡 優来)

◆ 自分で考えたこと

今回の野外活動支援では、児童の持つ自主性を多く感じ取ることができた。飯盒炊爨においては、児童一人ひとりがその時にすべきことを自分の頭で考えて行動していたため、次の活動へ滞りなく移行することができていた。また、キャンプファイヤーにおいて、1つの班のスタンプが終わり、円が乱れていることに気づいた児童の声かけに倣って全員で円を整えていく様子は、児童が常に周囲に注意を向けることができていたことの現れなのではないかと感じた。

(英語教育専修2回生 春本 杏)

奈良市立東市小学校野外活動支援

◆ 概要

自然学習の教員補助、飯盒炊飯の補助、主に釜戸の管理、キャンプファイヤーの補助、スタンプ指導を行った。

◆ 自分で考えたこと

活動全体を通して、自分の野外活動の知識の拙さを痛感し、より良い支援ができるように自分を高めようと思う契機になった。また、児童がグループ活動中にいざこざを起こしてしまった時には、教師が「野外活動をみんなで楽しむ」という本来の目的に立ち返らせていた。グループで協働することの難しさと、その意義を体験的に学ぶことができた。

(国語教育専修 3 回生 無量井 夏音)

◆ 自分で発展させたいこと

私が発展させたいことは、自主性と、準備の良さだ。

まず自主性に関してだ。今回の野外活動支援は、私にとって初めてのもので何をしたらよいかかわからないという状況が何度もあった。その時、何かはしないといけないと思い、周りを見たり、先輩が何をしているのかを見て、真似をすることしかできなかった。しかし、真似をするというのは、周りよりも遅れて行動するということになるし、周りの人がすでにしているということは、そこの手は足りている可能性だってあり、むしろ自分が行くことで邪魔になることだってあると考えられる。実際、先輩方の動きを見ていると、旗を一人で取りつけようとしている先生を見て、手伝いに行ったり、キャンドルファイヤーの準備をしている先生を見て、自分から手伝いますといい行動していた。私も、自分から困っている人を見つけて、積極的に、そして自主的に行動していかなければならないと思った。自分のこれからの活動の中で、本当に役に立つ行いをできるようになるためにも、もっと積極的に行動する力を発展させたい。

次に準備の良さのことだ。キャンプファイヤー場の水抜きをした後、みんなの手に、細かい枝が大量に刺さっていた。指ではなかなか抜けなかったが、先輩がピンセットを貸してくださった。その準備の良さに私も見習わなければならぬと思った。予定に、水抜きはなかったけれど、もしかしたらそのような状況になるかもしれないと先のことまで考え、どんな状況にも対応できるように準備しておくことは本当に大切だと思った。これからは、様々な状況を想定してきちんと準備していきたい。

次回以降の活動をより良いものにできるよう、今回の反省、学んだことを十分に生かしたいと思う。

(英語教育専修 1 回生 木村 結衣里)

奈良市立平城小学校野外活動支援

◆ 概要

キャンプファイヤーのスタンプ・野外炊飯の調理、火の管理、あと片付け・ベッドメイキングの手伝い

◆ 自分で発展させたいこと

今回、自分で発展させたいと思ったことは、児童に対する声掛けである。今回、初めて実際の小学校に支援に行ったが、はじめは、どのように声を掛けたいか全くわからず苦戦した。しかし、先生方の声掛けを意識的に聞いたり観察したりしながら、少しずつ挑戦していった。少しではあるが、自分の声掛けの仕方がうまくなったのではないかと最終的には感じる事ができた。このことから、児童が自ら考えることを促す声掛けについて発展させたいと思った。

(心理学教育専修1回生 榎田 彩香)

◆ 自分で考えたこと

子供との関わりあいの中で、子供の可能性や素質の大きさをひしひしと感じた。特に感じたのが、私の班の野外炊飯において、野外炊飯のリーダー的存在の児童が、手が余っている児童などに指示をしたり、私に対してもここの人手が足りないから手伝って欲しいなどの交渉を行っており、すごいと感じた。その他にもたくさん感心することがあったが、その成果は日々の平城小学校の先生方の指導のおかげなのだと考えた。平城小学校では、生徒に主体的に行動させるという指導を行っており、日々子どもたちはそれを実践している。この野外活動において、子どもたちの素質や可能性が見られたことがすごく良かったと思う。

(心理学教育専修1回生 谷山 陽輝)



奈良市立済美小学校野外活動支援

◆ 概要

2024年6月26日（水）に、奈良市青少年野外活動センターにて、済美小学校の野外活動支援を行った。支援内容は、野外炊飯の片付けの補助とキャンプファイヤーの補助である。今回は、ファイヤーキーパーとギター演奏を基に「みんなの広場」のゲームをさせていただいた。

◆ 自分で考えたこと

今回は、ファイヤーの木組みからさせていただいたのだが、全て最初から木組みを行ったのは初めてであった。最初の方から木が崩れてしまい、木を継ぎ足しながらなんとか火が消えないように持たせることができた。途中もう消えてしまうのではないかと何度か思ってしまい、泣きそうになることもあった。しかし諦めることなく木を入れ続けると燃え続けていた。諦めたらそこで終わってしまうということを改めて認識した。根性でなんとか持ちこたえた瞬間であった。今後も野外活動支援に行かせてもらおうと思うのだが、そんな状況は良くないので、教えてもらうことができる機会に出向き、改めてもう一度学びなおしたいと考えた。自身の経験に対して、知識や情報量が伴っておらず、反省とともに悔しさを感じた。ユネスコクラブを背負っているという自覚を持ちながら今後も更に成長していきたいと考えた。

（特別支援教育専修3回生 才田 優佳）

◆ 自分で考えたこと

飯盒炊爨の後片付けの際に生徒から「これって合格（洗え切れている）かな」と聞かれた際に、出来ているよとも出来ていないよとも言ってあげられなかった＝基準が分からない！と感じて小学校の先生に尋ねると「次の人が使うときにどう思うか（具体的には洗剤や炭の残り方についても言及してらっしゃいました）」と生徒に問いかけていた。これを見て思ったことは、一般的に正解だと思われる基準を教えることよりも他者の立場に立って行動することがこの飯盒炊爨では大切にしている目的なのだと感じた。スタンプがすべて終わるころには子供たちが「先生！」と呼んでくれて話をしてくれたり手をつないでくれたりしたことで親しみをもって接してくれていると実感できてがすごく嬉しかったし、これが野外活動のやりがいの一つだろうと感じた。

◆ 自分で発展させたいこと

ある活動を通してどんな力を生徒に養ってほしいのか、目的は何なのかを常に意識したいと思った。いろんなスタンプの中でも、ルールがあいまいなもの（例えばお題の解釈が人それぞれであるもの）があって、それに対して生徒同士の口論になっていたところがあった。そういったスタンプをしないことで口論を避けるのもいいと思うが、単純明快なゲームだけでは子供たちの独自の発想のぶつかり合い（もしかしたら相互理解のヒントになるかもしれないという点でいい意味で）を阻害してしまうことにもなるのかなと感じて、あまり答えが見つけれなかったので次の野外活動支援への参加やほかの参加者とのコミュニケーションなどを通して見つけていきたい。

（国語教育専修1回生 玉井 綾音）

奈良市立都跡小学校野外活動支援

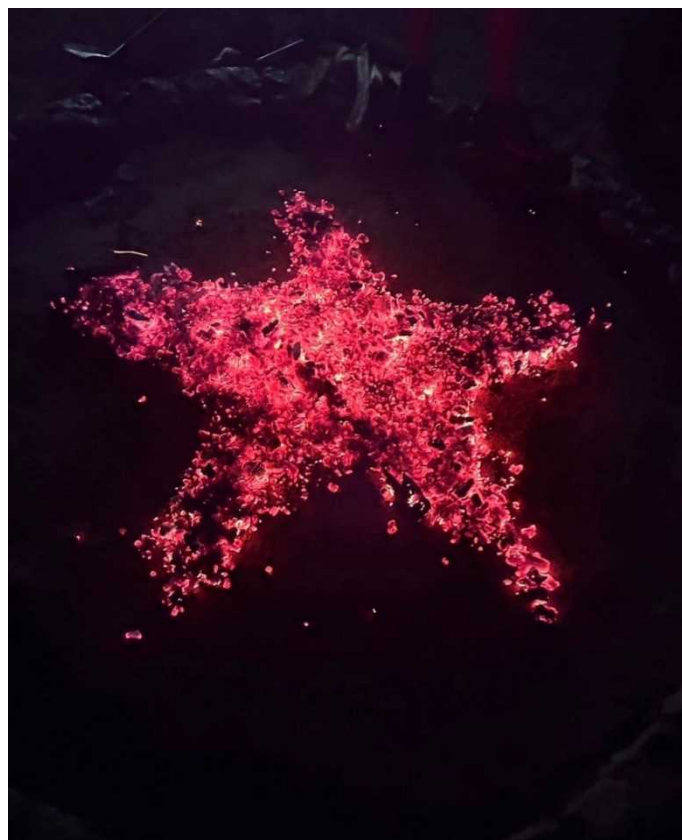
◆ 概要

奈良市立都跡小学校の野外活動支援に参加した。当日の朝、先生方や児童と一緒にバスに乗り、野外活動センターまで向かった。午前中は、児童がセンターの周辺を散策するオリエンテーリングの通過点に立ち、児童を見守った。午後からは野外炊飯とキャンプファイヤーの支援をした。野外炊飯では、主に竈での火の管理とカレーのルーを作る際の準備と片付けのサポートをした。児童たちと作ったカレーを食べた後に、キャンプファイヤーをした。キャンプファイヤーでは主にファイヤーキーパーと児童のスタンプの盛り上げ役をした。初めて参加する学生もいたが、周囲の状況を見て行動して主体的に行動することができた。児童や先生方ともコミュニケーションを取りながら取り組むことができた。

◆ 自分で考えたこと

今回の野外活動支援で学んだことは、2つある。1つ目は、野外活動支援当日までに小学校と初めて打ち合わせをした。その際にこれまで先輩方が裏で進めてくださっていたことや先生方の努力に気付くことができた。2つ目は、子どもたちのスタンプについてである。1班の持ち時間が10分と少し長く、子どもたちは疲れて集中力が切れないか心配であった。しかし1班ずつ登場する際に班ごとに考えたオリジナルの掛け声をしたり、練習を組み込んだりするなどして、ファイヤーが円滑に進んでいた。子どもたちが一体となって団結し、全力で取り組んでいた姿に感動した。

(特別支援教育専修3回生 才田 優佳)



奈良市立富雄南小学校野外活動支援

◆ 概要

富雄南小学校5年生の野外活動支援に参加した。大西先生に送迎していただいて奈良市青少年野外活動センターに到着し、午前中はオリエンテーリングのチェックポイントに立って子どもたちを誘導した。オリエンテーリング終了後は昼食を食べながら、一緒に野外活動に参加したメンバーと全体の打ち合わせを行い、子どもたちが布団の準備をしている間、先生たちと一緒に竈作りの準備を行った。その後、15時頃からカレー作りを開始し、カレーを食べ終わると、子どもたちがお風呂に入っている間にキャンプファイヤーの木の組み立てを行った。今回はユネスコ主体のスタンプ等がなかったため、子どもたちのスタンプの盛り上げ役や安全確認に徹した。初めて参加して不安だったが、先生や子どもたちとコミュニケーションをとりながら活動することができたので、とても良い経験になったと思う。

◆ 自分で考えたこと

今回、野外活動支援に参加して、初めてということもあって少々バタバタしてしまったが、子どもたちと話したり竈の火の面倒を見たりするのはとても良い経験になったと思う。反省点としては、話しかける子どもが偏ってしまったことである。思い返すと今回、自分が女というのもあって、無意識に女の子とばかり話しているなと感じた。教師という仕事において「平等に接するのが難しい」という話をよく耳にする。今まで、それは何かしらの障がいを持っている子に対して、目立つ子に対して、などのことだと思っていた。だが、実際「教師」の立場に立って子どもたちに接してみると、全体に平等に接するというのは本当に難しいことなのだ実感した。次回は、意識して色々な子どもに話しかけていければいいと思う。

(美術教育専修1回生 川野 由香里)

◆ 自分で考えたこと

私は今回初めて丸一日の野外活動支援を行った。これまでは野外炊飯やキャンプファイヤーのスタンプなどを主に行っていたが、今回はオリエンテーリングのスタンプラリーにも参加し、子どもたちにクイズを出したり、注意事項を説明したりする役割を担当した。学校の先生と一緒にさせていただいたが、そこから、野外活動に伴う危険やそれらを子どもたちがしっかり理解できる言葉選びなどを学ぶことができた。これからの活動に活かしていきたい。

(教育学専修2回生 福原 千畝)

◆ 自分で考えたこと

今回の野外活動支援から、当日起り得るリスクについて事前から考えておくことの大切さを学んだ。野外炊飯時に向かい風に乗った大量の煙により苦しい状況になったり、キャンプファイヤー時に燃え上がりすぎたりと、想定外のことが起きた。その時に、冷静な判断ができず、焦って行動してしまった。今回は何事もなく終わられたが、焦って行動してしまうと、より危険な状況を招くかもしれない。何かあっても落ち着いて行動できるよう、次回からは起きる可能性のある事やその時の対応法について事前に考えておこうと思う。

(英語教育専修1回生 木村 結衣里)

奈良市立安堵小学校野外活動支援

◆ 概要

風とんぼ野外活動センターに野外活動支援に行かせていただいた。今回はキャンプファイヤーだけの支援であった。全体で1時間しかキャンプファイヤーの時間がない中、途中からの30分のみ参加させていただいた。短い時間の中で信頼関係を構築し、一緒に楽しむことは初めてであり、難しく感じた。最後には「ひまわりの約束」を歌ってキャンプファイヤーを締めていた。迎えにきてくださるまでに時間があつたので、児童が班で夜食を食べている時に、今日あつた話などを聞いて、関わることができた。

◆ 自分で考えたこと

今回野外活動支援に行つて得た新たな発見は、主に2つある。1つ目は、キャンプファイヤーの時の立つ位置である。先輩方からキャンプファイヤーの時には、火の方を向いて火を通した相手の方を向く様に教えてもらつていた。キャンプファイヤーの際に子どもたちは外側を向いて話しており、子どもたちの背中だけが照らされており、良く見えづらい上に聞こえづらかつた。改めてキャンプファイヤーの時には、火の方を向いて話すことの大切さを感じた。2つ目は、児童のゲーム「はなやかさん」の時のことである。私自身が当てられた時には、せっかくだから児童にとって面白くしようと思ひ、ゲーム中に面白い答え方を考えていた。結果的に思つていたこととは違つたが、児童に笑つてもらふことができた。ゲーム等で児童と遊ぶ時には、児童の目線に立つて全力で取り組むことが大切だと改めて感じた。

(特別支援教育専修3回生 才田 優佳)

一条高校附属中学校キャンプ in 滋賀

◆ 概要

休暇村近江八幡にて、一条高校附属中学校の生徒たちが行うキャンプファイヤーの補助学生として参加した。この本番に向けて2～3回に渡り附属中学を訪れ、事前指導を行つた。事前指導では、初めて考えるスタンツに苦戦し、スタンツの説明文をどのように書けばよいか分からず、何十分も固まつたままの生徒の姿を見て「こんなんで、大丈夫かよ。」と思つていたが、本番ではクラスメイトの心をつかみ、パンチのあるMC力で盛り上がりを見せていた。「ああ、中学生の頃に戻りたいなあ。」と思わされるほどだつた。

◆ 自分で考えたこと

「先生のリーダーシップとそれに答えてやる気になつた子どもたちの姿」について考えた。

2～3回の事前指導で子どもたちはやる気や盛り上げるノリはあるが、スタンツの説明文をどのように書けばよいか分からず、何十分も固まつたままとつた頼りない姿を目にし、不安になつていた。しかし、本番で彼らが見せた堂々とした態度でスタンツを回し盛り上げていく姿を見て驚いた。おそらく、担任の先生方のリーダーシップに子どもたちが感化され、スタンツに向き合う良い姿勢ができたから、素晴らしいスタンツになつたのだと考える。私は小学校教員を目指しているので、4年生のスタンツを担当する際は、一条の先生方のように類まれなリーダーシップを発揮できるよう私に必要な力は何かをしっかり考え、足りない部分はきつちりと知識技能を蓄えたいと思ふ。

(美術教育専修3回生 東 瑞)

第1回春日山原始林フィールドワーク

◆ 概要

春日山及び若草山を登り、道中の自然とふれあいつつ生態系を感じる。

◆ 自分で考えたこと

道中歩いて、シカの影響が森にあまり良くない影響を及ぼしていることを知った。奈良といえばシカで、シカといえば奈良だというようなイメージを持っていたが、シカでいっぱい奈良公園の裏手にある春日山原始林ではシカによって生態系が狂わされかねない影響を受けていることを学んだ。奈良にとって観光資源としてのシカは素晴らしい価値を持つが、原始林にとってのシカは生態系の多様性を狭める良くない動物になっているこの現状、今まではシカが良くない影響を与えるものがあるなどと考えたこともなかったが、実際に春日山原始林に登って自然を目にすることでその影響をまざまざと感ずることができた。

◆ 自分で発展させたいこと

自分で考えたことでシカの例をあげたのでそれに関連したことを発展させていきたい。上記ではシカが原始林にとって全くの悪い影響だけを与えているような書き方をしたが、それだけではないはずだと思う。確かにシカは原始林にとっては生態系の多様性を狭め、木の樹皮を食べて枯らせ、新しい芽を食べ尽くすような動物だが、なにか良い影響の一つでも与えている、そもそも問題点はそこではなく、シカが増えすぎたことが原因なのではないかと考え、春日山側から一方的な視点で考えるのではなく観光産業側からの視点も大切にしてシカとのより良い共生などについてもっと深めていきたいと思った。

(国語教育専修1回生 泉 俊佑)



第 3 回春日山原始林フィールドワーク

◆ 概要

- ・国の天然記念物に指定されている春日山原始林にて、樹齢 300 年以上の樹木などの貴重な生態系を観察する。五感を使って、自然を感じ、楽しむ。
- ・普段はなかなか体験することのない、夜の山で、寝転がって五感を研ぎすまし、全身で自然を感じる。夜の道をあえて、懐中電灯をつけずに少し歩いてみることで、視覚以外の感覚を研ぎ澄ましてみる。夜ならではの、動物の鳴き声や風で揺れる木々の音などを聞いてみる。
- ・鹿を神獣として保護している奈良県ならではの、課題やその対策などを学んだり考えたりする。

◆ 自分で考えたこと

春日山原始林には、樹齢数百年の樹木が並んでいることは知識として知っていたが、実際に目の前にしてみると、想像よりも大きく、これらを守り続けてきた奈良の人々がいたからこそ、今こうやって見ることができるのだと思い、昔の人達や、今も守り続けている人達に感謝しないといけないなと思った。夜の山で歩くこと自体が初めての経験で、山の中で寝転ぶなんて事もしたことがなかったので、新鮮だった。視覚に頼らないで他の感覚に任せてみると、動物の鳴き声や水の流れる音など、色々な音が聞こえてきたり、風の流れや湿気が感じられたり、普段あまり意識しないようなことが感じられて、こういった経験は本当に貴重だなと感じた。私は京都の京都市という都会で育ってきたので、自然の中で学ぶ経験が少なかったため、特にこのような経験をするたびに、このような経験から得られる学びの重要性に気付く。最近では、どこも再開発が進み、自然に触れる機会も減っているように思う。再開発をする際に、もっと自然を取り入れるべきなのではないかと思った。

野生の鹿と人間がここまで共生できている場所は世界中で見ても、奈良は珍しいと思う。共生ができていることはとても素敵なことではあると思うが、鹿だけを大切にしているのは、周りの生態系を壊してしまうことにつながるということが分かった。生態系内の生物多様性が失われることは、地球規模で考えると望ましいことではない。奈良の人にとって、身近の鹿との付き合い方を考えていく必要があるのだなと感じた。

◆ 自分で発展させたいこと

- ・私は将来的には理科の教員を目指しており、春日山原始林は教材として使えるなと感じた。同時に ESD 教材としてもとても良いものだなと感じた。座学で、春日山原始林について題材にするのもいいと思ったが、できれば実際に足を運び、体験しながら学んで欲しいなと思った。将来的に授業で生かせるように、実践案を考えていきたい。
- ・動物と人間が共生しているような地域として有名なものとして、オーストラリアがあると思うが、オーストラリアではどのような共生の仕方をしているのかを知ろうと思った、そこから考えられる、奈良での鹿との向き合い方なども見えてくるのかもしれないと感じた。ただ、オーストラリアは日本とも風土や制度も違うので、それらも踏まえて考える必要があるように感じた。

(教育学専修 1 回生 岸本 樹)

第 6 回春日山原始林フィールドワーク

◆ 概要

- ・ムラサキシキブ、ヤブムラサキ（植物）
- ・照葉樹林（つやつやしてる葉）＝光を反射しており透かしても光通さない
紅葉とかは光を通す（透ける）＝洛陽紅葉樹
- ・人工林では（つる性の植物はすぐ切られるため）見られないほど成長したフジ
- ・大正 15 天然記念物一の石碑

◆ 自分で考えたこと

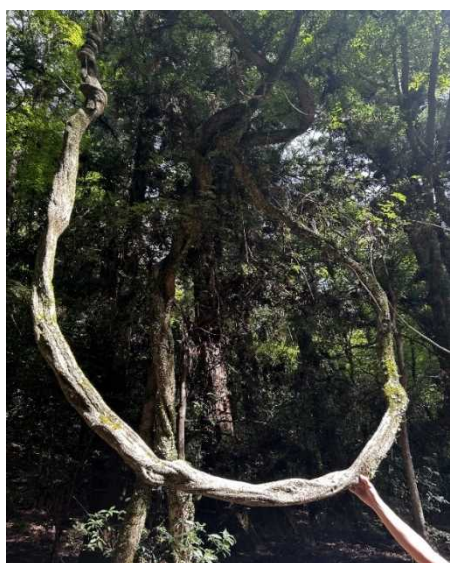
ムラサキシキブやヤブムラサキの葉について聞いたときどちらも同じなように感じていたが、感触の差や一方のみを食べる生き物がいることを知り森ではその小さな多様性が大事なのだと学んだ。大正 15 年、天然記念物として認められたことでこの森は”神が住んでいる”とは違う、守るべき価値が生まれたのだと知った。だからこそ、実際に今まで開発されずに残り続けられているのだと思う。

また、鹿に食べられることで春日山原始林にある植物が偏ってくること、木が倒れてできたギャップがそのままになっていることなどの問題についても今後考えたい。

（数学教育専修 1 回生 山上 紗奈）

今日のフィールドワークに参加して一番印象に残っていることは鹿がいることによって春日山の森林の循環が壊れていることだ。鹿と森は上手に共存していると思っていたが、そうではなかったことが分かった。鹿が食べるものも失くしたくないし、森の循環も大事だから難しいなと思った。また、鹿を避けるために柵が設置されているなどの工夫がされていて驚いた。春日山には初めて登ったが、太い木や様々な動物がいて自然を感じることができた。今回の活動で、世界遺産にもなっている春日山でも知らないことや問題がたくさんあることに気づいた。将来教師になった時に、理科の授業や生活の授業などとつなげて子供たちに教えられるようになりたいと思った。

（数学教育専修 1 回生 大塚 彩葉）



アースデイ奈良に参加して

◆ 概要

奈良教育大学ユネスコクラブとしてブースを出し、防災という観点からユネスコクラブの取り組みをポスターにして展示した。また、アースデイのボランティアスタッフとして、会場の設営やスタンプラリー担当、会場案内担当を行った。

◆ 自分で発展させたいこと

自分が石川県珠洲市に災害ボランティアに行った経験をまとめた新聞を多くの人に手に取ってもらい、防災に関する意識の高まりを感じた。ボーイスカウトとしてのボランティア参加であったが、ユネスコクラブでもこの経験を活かせることは良い経験になった。

(社会科教育専修3回生 小南 舞桜)

◆ 自分で考えたこと

今回、アースデイ奈良に参加して、改めて環境のために何をすべきか考えて行動されている方が多くいらっしゃることに驚きを覚えた。そして、来ていただいた方に、どのようにして環境問題について考えてもらうかというところまでの手段がそれぞれの発表団体さんごとに色が出ていて、非常に興味深かった。今回の展示の中で、私が最も興味深かったものは、市民生活協同組合ならコープさんの「デコ活チャレンジ宣言」という展示である。これは、「毎日の食事で、食べ残しを出さない・生ごみを減らす工夫をしている」「移動手段をなるべく、徒歩・自転車・公共交通機関にしている」「川を汚さないために、食器などの汚れをふき取って洗い物をしている」「繰り返し利用できるマイボトル・マイバックを持参している」という4項目について、自分ができている行動の下に正の字を書き足していくというものだった。この活動は、参加人数が増えれば増えるほど、この活動をしている人の数が可視化され、自分も行動しなくてはならないなという意識を生み出すことが期待できるのではないかと考えた。その中で、若い世代の参加というのが、環境問題を扱うアースデイでは大切になってくるため、若い世代に来てもらえるような展示が次回はできたらいいと思った。

(社会科教育専修2回生 芝田 棕伍)

東大寺寺子屋支援

◆ 概要

毎年東大寺が企画しているイベントで、奈良県の小中学生が 20 人程度集まり、東大寺の僧侶、奈良教育大学の学生と東大寺周辺の神社仏閣を巡り、奈良の魅力を再発見するというものである。

◆ 自分で考えたこと

私が学んだことは「東大寺の大仏様には、子どもの心を動かす魅力がある。」ということだ。子どもたちの中には歴史や文化に興味がなく、「親の意向で参加した。」と言ってモチベーションの低い子がいた。だが、夜の大仏様を前にその神秘的な美しさに感動し、「やっぱり、この企画に参加してよかった。」と話していた。

企画を通して、子どもたちは大仏様を「大切な宝物」だと思い、奈良に対する郷土愛が高まったと思う。奈良県で教員を目指す者として同じような感動を子どもたちに届けたいと強く思った。私は北河原公慈さんと 1 回生の濱口さんと同じ班になり、子どもたちが奈良の魅力を発見し、郷土愛を育み「ならってええとこやなあ〜」と感じてもらえるよう北河原さんに質問したり、こまめに声掛けして子どもたち自身が気づいたことを引き出したりした。特に、「親の意向で参加しただけや。」とやる気のなさそうにしていた子が、神社仏閣を巡るたびに話す回数が増え、気付いたことを発表するようになっていく姿に感動した。

(美術教育専修 3 回生 東 瑞)

4 班の子どもたちは思ったことを何でも口に出してしまう子、なかなか周りの子と馴染めない子、東大寺寺子屋に嫌々参加している子などが多かったため、ふざける場面が多く、お坊さんを困らせていた。その中で、班付きの私ができることはなにか、班付きの役割はお坊さんが話しやすい環境や姿勢をつくることである。そこで、夜の反省会の時に 1 日目の活動で良かった点、改善すべき点を伝えた。このためか、2 日目は子どもたちが隅々まで掃除をする姿、真剣にメモをとる姿、お坊さんの話を黙って聞く姿が見られた。最後の漢字発表では、それぞれが何か一つでも学んでくれた事が分かり、嬉しかった。

この活動を通して、グループ活動をまとめることの大変さ、また、「何か一つでも学んで帰って欲しい！」という私の思いを子どもに伝える難しさを学んだ。学年もバラバラで、親御さんに言われて、嫌々参加している子もいる。そんな中での、言葉選びや子どもに分かりやすく指導するにはどうすればいいのか考えるいい機会だった。

(美術教育専修 3 回生 辻 奏美)

第1回万葉文化館授業づくりセミナー

◆ 概要

飛鳥宮跡のフィールドワークと万能文化館の見学

◆ 自分で考えたこと

飛鳥宮跡のフィールドワークを通じて、万葉集の歌が詠まれた歴史的背景を知ることができた。飛鳥の宮が次々と造営され、やがて都が移る中で、宮廷に仕えた人々の寂寥感が歌に表現されたことが印象的だった。また、政治の変化によって人々の役割も変わり、歌が精神的な拠り所となった点にも興味を持った。特に、山部赤人が飛鳥の美しさを讃えた長歌の歌碑は、当時の人々が抱いた郷愁や憧れを今に伝えており、歴史と文学の結びつきを強く感じた。

(国語教育専修3回生 無量井 夏音)

2025 大阪・関西万博開幕1年前イベント NARA YOUTH EXPO

◆ 概要

2025 大阪・関西万博の概要や来年の関西万博に向けて奈良県がどのように活動し、世界に発信しようとしているのか(中田大貴教授や奈良女子大学やその附属学校・奈良教育大学の活動)を学んだり、佐々木良氏(万葉社の設立経緯や自身の体験談など)と植田佳奈氏(声優になるきっかけとなったこと、人生論など)のトークショーを聞いた。その後これまでのお話をふまえた知識や奈良にまつわることを問うクイズ大会に参加した(第1問目の質問がミャクミャクと答える問題であったため完全に油断していたが4問目から知らない知識が結構問われて、非常に勉強になった。またこれらのクイズを通して奈良にはまだ自身が知らない魅力が沢山あることを知った)。

◆ 自分で考えたこと

万博が2025年大阪で行われると知った時、私はそれが具体的にどういったものなのか、またどれだけすごいことなのかということをおぼろげに把握できていなかった。しかし、その1年前記念イベントが奈良で行われるということで「なら100年会館」に行き、実際に万博に向けて取り組まれている方や団体についてお話いただいたことを通じて、自分の知らない沢山の領域のものが世界各国から集結することに興味・関心が湧いてきた。また、この祭典を自分が生きているうちに身近に感じられる機会が来年に迫ってきていることを思うとワクワクが止まらない。万博が日本で行われる意味は、日本を世界に発信するためであるが、いきなり日本全国のことを広めるには限度があると思う。そこで、日本の一部である奈良がその一端を担い世界に発信していくことは、非常に重要なことであると思う。そうした中で、予想以上に自身と同世代の方々が活躍されていることを知れて誇りに思った。

(教育学専修1回生 今岡 優)

こどもおん祭 ボランティア活動

◆ 概要

毎年 12 月 17 日に世界遺産の春日大社が行う「春日若宮おん祭」を地元の人や観光客などに知ってもらおうと開催している市民参加型の行事。クイズラリーや、手作りゲーム、くじ引きなど、楽しみながら、子ども達や大人の方も「春日若宮おん祭」について学べる。手作りゲームや模擬店をするために、200 円を払ってもらいが、そのお金は全て「春日若宮おん祭」実施のための募金として、春日大社に寄付される。私達は、ならまちセンターの広場でスーパーボールなどが揃える「いろいろすくい」という模擬店を担当し、募金への貢献と、中で行われている「春日若宮おん祭」について学べるクイズラリーを勧めるなどの活動をした。

◆ 自分で考えたこと

京都出身の私は「春日若宮おん祭」という言葉を聞くのが初めてで、「こどもおん祭」という「春日若宮おん祭」を知ってもらうための行事があることも初めて知った。伝統的な行事を守っていくため・知ってもらうために、子ども達に伝えることはとても大切なことだと思った。

ただ学ぶ・知るとなると、やっぱり子ども達はやらされている感がどうしても出てしまうと思う。「こどもおん祭」では、子ども達が楽しみながら学べるようにクイズラリーや、スタンプラリーなどを企画し、子ども達が積極的に学んで帰ってくれるように取り組んでおられ、この姿勢は、私達教員が授業をする際にも必要だと思った。子ども達の主体的な学びの実現のために、授業の構成などを考える必要があるなと思った。

子ども達と関わる機会が今回の活動では多く、初めは緊張して積極的になれずにいた子が、徐々に積極的に自ら頑張ろうという姿勢になったことに驚いた。つつい「手伝ってあげよう」としてしまうものだが、じっくり待ってみるといっても、大切なスキルなのだと感じた。適切な手助けが子ども達の自立的な成長につながるのだなと思った。

(教育学専修 1 回生 岸本 樹)

私は、今回このイベントにボランティアとして参加することを通して、このおん祭の存在を知ったのだが、準備に携わる人も含めて全体的に私よりもはるかに年下の子どもたちが沢山いて、その子たちが積極的にこのお祭りを盛り上げようとしている感じが伝わってきて、こういった伝統的な行事の存在を広めていく上で若い世代が活躍していくということは、非常に喜ばしいことであると感じた。また、おん祭についてより多くの方々に認知してもらおうという観点においては、オープニングの和太鼓の演奏を親子で見に来られている方が多く、子どもたちが小さい頃からこういった伝統芸能に触れる機会が設けられていることは、非常に重要なことであると感じた。イベントでは主に屋外のミニゲームの「いろいろすくい」の企画の運営を担当した。その際に、上手くできない子どもたちにどう声かけをしたら自力で、尚且つ楽しんで遊んでもらえるのかを考えるのが楽しかった。そして、実際に私たちの声かけやサポートでうまくすくえるようになっていく子がいたのも、その子の成長を感じることができて嬉しかった。今回のボランティアを通して、私はほぼ毎日通っている奈良にはまだまだ知らない伝統文化や伝統芸能があることと、将来教師になることを志す中で何かにチャレンジしようとする子どもにどう向き合っていけばよいかなどを短期間でかなり勉強することができた。

(教育学専修 1 回生 今岡 優)

学ぼう！飛鳥の地蔵盆2024

◆ 概要

SDGs フィールドワークの授業における「学ぼう飛鳥の地蔵盆」の運営

事前説明：お地蔵さまと地蔵盆について

フィールドワーク：お地蔵様や地域の地蔵盆について解説

事後活動：クイズ、折り紙でお地蔵さま作り

パンフレット製本：各担当の地図、歴史、お地蔵様、地蔵盆についての資料作成

(教職大学院 (M1) 太田 遥)

◆ 自分で考えたこと

今回の活動では、フィールドワーク前後の活動の企画や担当地域への取材、製本作業など、学生が主体となって行った。全体の活動を通して印象に残ったことは、人と人とのつながりだ。

・ 地域の方々とのつながり

今回、下高畑町の調査に携わらせていただいた。主にお世話になったのは、自治会長の清水さんと、大槻さんだ。製本や当日の活動に関しても、このお二方を始めとした下高畑町の地域の方々との交流があった。歴史的な事柄はもちろんのこと、私の専門である書道に関する事など、様々なことを話して、議論して、談話をした。地域の方々とのつながり、一つの活動を実施すること、地域の方々とのつながりを持つことはとても良い経験となった。

・ 飛鳥公民館の方々とのつながり

飛鳥公民館の方々とは、何度も打ち合わせを行い、ともにイベントを実施する共同者という立場であった。飛鳥公民館の方々の想いを聞き、踏まえながら、一緒に企画運営する経験はとてもよかった。

・ 地域の子どもたちとのつながり

参加してくれた子どもたちは、暑い中、とても元気で楽しんでくれた。走り回って地蔵様を回ったり、それぞれの地蔵様の説明を静かに、真剣に聞いてくれたり、折り紙をすぐに作ってくれて、かわいいと言ってくれたり、と、様々な姿を見ることができた。

◆ 自分で発展させたいこと

今回の活動から、様々なの方々とのつながりを意識し、感じる事ができた。普段の学生生活ではここまで多くの方々に関わる事ができない。今回経験したことは今後の学生生活はもちろんのこと、これからの人生においても役に立つと考える。つながりを持つことは大変だけど素晴らしく、かけがえのないものだと思った。

(教職大学院 (M1) 福田 実利)

富雄公民館環境企画

◆ 概要

8月4日(日)に富雄公民館にて SDGs 企画を開催した。今年のテーマは環境で特に「海洋資源」と「地球温暖化」に焦点を当てた。

海洋資源においては、汚れた生活排水が海へ流れると魚などの海洋資源が汚染され、その汚染された資源を我々が食し、病気になるという流れで説明し、これを解決するためには「自然に優しい洗剤を使う」「食べ残しを減らしてよごれをなくす」「ごみの分別を徹底する」といった子どもたちでもできそうな身近なところから生活を変えていこうと呼びかけた。

地球温暖化については、電気のムダ遣いが気温の上昇を引き起こすことを火力発電のメカニズムを通して解説した。また、気温が上昇すると熱中症警戒アラートが発令され、休み時間に外で遊べなくなるといった身近な問題が起きることを説明し、生活のあらゆる場面を想定しながらこまめに節電する事例を紹介した。

難しい専門用語は子どもの理解に合わせた言い方に変え、言い換えが難しい部分については劇を交えた。そして、受動的なコンテンツにならないよう海洋資源のパートでは子どもたちが、えびやまぐろなどのお面をかぶり体にゴミを付け汚れた海で過ごす魚の気持ちになるゲームも行った。これが大変好評であった。

◆ 自分で考えたこと

毎年、富雄公民館で開催している SDGs を子どもたちに楽しく分かりやすく伝える企画で、私は1回生の時から参加し今年で3回目を迎えた。振り返ると初回からずっと環境に関する内容を行っている。それは、SDGs の目標の中で子どもに身近な内容が「環境」だからだ。また、彼らが今後の日本を作っていくため、環境に対する配慮ができる人間を育てることは環境における次世代教育であり悪化する地球環境の中で重要な役割がある。今後もこのような教材開発を行い、ワクワク楽しいけどしっかり学びになる授業を展開していきたい。

(美術教育専修3回生 東 瑞)

◆ 自分で発展させたいこと

私は今回参加してくれた子供達の知識の多さに驚いた。これからの暮らし方としてこまめに電気を消費ことやポイ捨てをしないことなどを例に出したが、子供たちは既にやってはいけないということを理解し、実行しているようであった。学校ではない場所で SDGs について教える立場として、子供たちの SDGs に関する理解度を知っておく必要があると考えた。

(数学教育専修2回生 筒井 茉啓)

奈良市立都跡中学校校外学習

◆ 概要

2024年5月30日(木)中部公民館で、都跡中学校一年生向けに「奈良の鹿と人々の共生」についての講義をさせていただいた。

◆ 自分で考えたこと

学んだことは二つある。

一つ目は、わかりやすい資料を作ることだ。

対象年齢を考え伝える情報を整理すること、図を使用し内容を視覚的にわかりやすくすることを授業資料作成過程で改めて学んだ。

二つ目は、机間巡視についてだ。

今回、机間巡視の際に、意見が出ていない班に他の班の視点をヒントで出すことや良い意見を褒めることを意識した。その結果、意見交流が進み始めた班や、全体で意見を交流する際に、恥ずかしそうにしかし自信に満ちた顔で発表する生徒を見ることができた。机間巡視の効果や褒めることの重要性について理解することができた。

◆ 自分で発展させたいこと

当たり前のことだと思うが、対象年齢・時間・目的等を明確にさせ、情報を整理し授業を組み立てることを意識していきたい。

(社会科教育専修3回生 木幡 美幸)

第5回ならやまオープンセミナーESD・SDGs 連続オンラインセミナー

◆ 概要

安田先生による大牟田市の地域と教育の融合、ホールシティによるESDについて学んだ。

◆ 自分で考えたこと

このセミナーを経て、ESDが地域の未来を創る戦略として機能し得ることを実感した。炭鉱閉山後の大牟田では、炭鉱遺産や公害克服の経験を活かした教育が、地域課題の解決につながる可能性があった。一方で、若者の流出や地域住民の主体性向上などの課題もあり、ESDの学びを実社会へつなげる仕組みが求められる。ここで、子どもたちが大牟田市の魅力を知り、広めるということがより重要になる。セミナーの中でも質問があったが、子ども大牟田検定を受けることがどのような効果を及ぼしたのか、知りたいと思った。また、地域住民が主体となる学びの場を増やすことで、持続可能なまちづくりに寄与できる。ESDで地域創生としての学びを実践に移すことが今後の課題だと考える。

(国語教育専修3回生 無量井 夏音)

あつまれ ECO キッズ！！

◆ 概要

奈良市内の小学生を対象に募集した「おしえて ECO キッズ！」の優秀作品の表彰と作品展示に合わせて、「たのしく ECO を学ぶ」イベントを開催した。エコと自然を楽しむ体験プログラムのほか、環境団体の活動を知り、体験する「ECO キッズお仕事体験」も行う。「もっとエコで暮らしやすい未来のために」をテーマにしたイベントであった。

「太陽エネルギーを電気に変えてつかおう」（アマテラス）では、ブースに来た子どもたちに、太陽エネルギーと電気の関係について説明をした。「フードドライブと食品ロス削減クイズ」（もったいない NARA）では、ブースに来た子どもたちに消費期限についての○×クイズを出題した。

◆ 自分で発展させたいこと

身近にあるものに「もったいない」と感じたことをどのように ECO とつなげていくのかについて考える機会が多かった。自分も生活するうえで ECO について気をつけたいと思った。また、教員になった際に子どもたちに ECO について考えさせるための導入やきっかけについて触れる機会にもなったので、この経験を生かしていきたい。

（教育学専修 4 回生 大西 遥郁）

◆ 自分で考えたこと

今回の活動を通して、異年齢交流の価値について学んだ。

ユネスコクラブのブースにおしごと体験に来てくれた児童に、附属中学校ユネスコクラブの生徒にエコに関するクイズを出してもらった。

児童は中学生が楽しそうにまた真剣にクイズに答える姿を見て嬉しそうであった。また、小学校 1 年生にも関わらず中学生相手に恥ずかしがらずにクイズを出していた。一方、中学生はエコについて詳しい小学生からクイズを出されていたため、その知識量や姿勢から刺激を受けていた。

短時間であったが、小学生と中学生が互いに楽しそうに学び合っている姿が見て取れ、異年齢間交流の価値を学ぶことができた。

（社会科教育専修 3 回生 木幡 美幸）

◆ 自分で発展させたいこと

今回の体験を踏まえて、子どもたちがエコについて考えられるこの「ECO キッズ」は、他のテーマにも応用可能だと思った。例えば、天平祭であるように当時の文化に触れる活動である。伝統文化教育を専攻しているものとして、今回の経験を踏まえて、子どもたちが伝統文化に触れる・知る・伝えるための活動をしてみたいと思った。書道だけではなく、文化財や音楽、美術、舞踊など、幅広い伝統文化に触れる機会が増えると面白いのではないかと考えた。

（教職大学院（M1） 福田 実利）

第1回 森と水の源流館授業づくりセミナー

◆ 概要

森と水の源流館の紹介、ESD の授業づくりについて、ESD の方向性、問題解決型の学習過程について、川上村の取り組みについて。

(教育学専修2回生 赤井 愛実)

◆ 自分で考えたこと

学校の遠足などで川上村などに訪れても見て終わりになる場合が学校に帰ってから、自分のこととして捉え、自分の地域でできることを考えて発表させるなど、活動をすることが大切だと考える。そして、児童生徒の相互評価を行い、他の班が考えたことも踏まえて自分の考えを深めるということまで繋げることで発展させることができると思う。ESD の授業では、教材を教師自身が探す必要がある。日頃から児童がどのようなことに興味関心を持っているかを観察し、それにつながるような教材を探すのが大切である。また、導入を工夫して児童を引きつけることができるようにすることも重要であると考え。良い導入をすれば児童たちから疑問が生まれ、そこから問いが生まれ、児童が主体的に取り組むことができる授業になる。中学校社会化における ESD の例では、ポテトチップスというとても身近なものから農業につなげていて、スムーズに授業の展開の方に進んでいけると思った。発問の仕方も工夫するところがたくさんあり、できるだけ児童に考える機会を与えるために、一緒に考えられるようなものを選ぶことが重要だと考える。

(社会科教育専修2回生 東條 奏子)

◆ 自分で考えたこと

今日のお話の中で中澤先生がおっしゃっていた「環境を変えてしまうのは人間だが、環境を変えられるのも人間である」という言葉がとても印象に残った。世界中で SDGs とか言われているがどこか他人事で、でかすぎる漠然とした目標だという印象を持っていた。しかし、自分たちがたとえ無意識であったとしても、自分たちの生活が地球環境を変え、壊しているかもしれないと思うと罪悪感が湧いてくる。それと同時にどうして SDGs のような目標が必要なのか、みんなで協力して持続可能な社会を未来のために作っていかうとしているのか目的がかなり身近にはなったようにも感じる。すると、今までどこか遠い国の知らないお話だったことが、自分たちに現実として迫ってくるため、自分ごと化というところにつながってくるのではないかと考えた。ESD はそれを実現することができる側面を持っているし、相手のことを知ろうとするというような気持ちを動かす側面も持っていることから、学習指導要領で言われているような生きた力、将来も自分で使っていくことができる力を養うことができるのではないかと考えた。

(教育学専修2回生 山田 真由)

◆ 自分で発展させたいこと

明日、ボーイスカウトの小学生部門の引率で吉野川に川遊びに行くこととなった。吉野川分水を享受する私たちが持続性のある水資源を守っていくためには何ができるのか、子供たちに考えさせたい。そのためにはまず、吉野川の水がどこからきているのかを考えさせ、私たちが普段利用している水が川の水由来であることに気付かせたい。また、川遊びやバーベキューによるごみ問題についても触れ、子供が自らゴミを拾ったり、きれいにしてから帰るようにしたりするといった行動化を促したい。

(社会科教育専修3回生 小南 舞桜)

第1回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

今回の講義では、SDGs とはどのようなものなのかを学習した。SDGs は、MDGs の目標をあらためて作り直したもので、2030 年までに達成するという目標である。MDGs は、ミレニアム開発目標で、極度の貧困と飢餓の撲滅、普遍的な初等教育の発達、ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上、乳児死亡率の引き下げ、妊産婦の健康状態の改善、HIV/エイズ、マラリア、その他の疫病の蔓延防止、環境の持続可能性の確保、開発のためのグローバル・パートナーシップの構築という 8 つの目標があった。SDGs は、MDGs ではなかった目標などを含め、全部で 17 の目標と 169 の達成基準と 232 の指標で構成されている。また、SDGs は地球上の誰 1 人として取り残さないことを目標としている。これは、全ての人々が自分の行動を見直して自分ごととして考える必要がある。最近では、気候変動が顕著になり、各地で豪雨災害が起こったり、地震が起こったりしている。能登の地震では、大きく地面が隆起した。身近なところで起こっていることの原因が気候変動によるものであることも多い。これからは防災にも力を入れる必要がある。

(社会科教育専修 2 回生 東條 奏子)

◆ 自分で考えたこと

前半部分で戦争について改めて考えたと同時に、自分自身安全な日本にすることが当たり前になっており、各国で起こっている状況に目を向けていなかったと実感した。ウクライナ戦争やパレスチナ戦争では、現在も多く多くの命が犠牲になっており、子どもたちの命も見境なく奪われている。自分自身も含め日本で生活しているとそのような状況に対して現実味がなく他人事として考えている人が多い。しかし、同じ地球で生活している人類として、自分事として考えていかなければまた、同じことがおこり子どもたちの未来につなぐことができない可能性もある。何も行動しなければ状況は悪化する一方だと危機感を覚えた。しかし、自分達にできることは少なく国を動かすことはできない。その中で自分にできることは、次の世代に戦争について伝え同じことを繰り返さないようにすることだと考えた。これから子どもたちの未来や地球の未来を守っていくために、小さいことでも、直接的な解決を自分自身ができなくとも ESD を通して活動していくことが大切であると考えた。

(国語教育専修 3 回生 吉岡 優来)

◆ 自分で考えたこと

プラスチックを植物性のものにすることで、マイクロプラスチック問題を解決しようとする取り組みが行われていると知り、大変驚いた。人間、変えようと思えばできるものなのだと気付かされた。調べたところによると、植物性のプラスチックを使った商品には、グリーンプラマークというものがあるらしい。これからは、なるべくグリーンプラマークの付いた商品を購入しようと思う。

SDGs が目指す世界像を自分なりの言葉で置き換えてみた。一つ目は、健康で自由であること。二つ目は、「平等」でその人がその人であることを尊重していること。三つ目は、持続可能な経済成長と働きがいのある仕事ができる、持続的な国をつくって行くこと。とした。難しい言葉をわかりやすく小学

生に言うならば嘸み砕く必要があると思い挑戦してみた。

SDGs は 17 個あるが、どこにフォーカスして授業を作っていくか迷いどころである。私の得意とする分野は、11 と 14 と 15 だ。なぜなら、日本でも解決しなければならない目標であるため身近に取り上げやすいからだと思う。しかし、このままでいいのかも思う。私は、英語が苦手なので世界のことに目を向けることはこれまで避けてきた。しかし、この機会に貧困や飢餓について触れることでもっと視野を広げたいと思っている。よって、今回は私があまり得意としない世界が抱える問題について取り上げた指導案を作っていきたいと思っている。

(国語教育専修 3 回生 田中 愛花)

◆ 自分で考えたこと

はじめに先生がオンラインでのあり方について説明されており、納得した。オンラインであっても普段と変わらない姿で授業に挑むことを改めて気付かされた。

また世の中の動きや現状を把握すること、把握しその上で子どもたちに教育をすることの大切さに改めて気づいた。目の前の子どもたちの視点しかないのと、世界規模で考え客観的に子どもを見るのでは違ってくると思うからである。世界的に見てみて、現在目の前の子どもたちはどういう状況であるか、何を知り、何を考えてもらうか等検討しながら子どもたちと接していきたいと思う。

更に、南海トラフ地震の規模の大きさに改めて驚いた。南海トラフ地震以外にも地球沸騰化など世界的な危機はたくさんあることを改めて分かった。今後も更に学び続け、多くのことを知り、実践でき、子どもたちにつたえていくことのできる教員になりたい。

(特別支援教育専修 3 回生 才田 優佳)

◆ 自分で考えたこと

ESD において、自分の地域では直接的に関連していると感じにくい諸課題に対し、その諸課題に直面している人々やその諸課題について自分事のように学ぶことが重要だということを学んだ。そのため、日本と密接に関係している環境問題や災害を取り上げるだけでなく、昨今のウクライナやガザの問題から考えさせられる平和について取り上げることが必要ではないかと考えた。

また、それらに関して、可哀そうだと思うことで終わってはいけない。それらを子ども達が多面的・多角的に見ることができるよう、教員側の深い知識や問題意識が必要であることも学んだ。そのため、日頃から広い視野を持って様々なことにアンテナをはらなければならないと考えた。アンテナをはるには当事者意識も欠かせないと気が付いた。

(社会科教育専修 3 回生 木幡 美幸)

第2回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

SDGs 達成に資する ESD の教育的価値について、これまでの学校教育を中心とする ESD の実践を通じて、その効果と成果として 2 つのことが指摘されている。①ESD に取り組むことによって、「教育の質が向上する」(ESD の E を重視する視点)と②「教育が持続可能な社会作りに貢献する」(SD=持続可能な社会の創造を強調する視点)である。この両輪の連結こそが ESD を特徴付けるものであり、ESD、すなわち「持続可能な社会を創る教育」の価値を示すものだといえる。日本の国連 ESD の 10 年の取り組みを振り返り、改めて ESD の基本的考え方を見直した。2030 年の ESD の全体的な目的は 17 の SDGs の達成を通じて、より公正で持続可能な世界を構築することである。

◆ 自分で考えたこと

SDGs の達成に資する ESD として、SDG4 の不可欠な要素であり、他の全ての SDGs の達成のカギである ESD の重要性の高まりに対応して、これからの私たちは行動していかなければいけないと感じた。ESD はすべての SDGs に貢献することを提案していることから、特に SDG4 の支援に焦点を当てて、人類の生存と反映への学習コンテンツの貢献をより重視している。このことからわかるように、これからの教育では持続可能な開発を促進するために必要な②知識及び、技能を習得できるようにする必要がある。ESD 連続セミナーを通して、人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性を育むとともに、他人との「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育てるように、学んでいきたい。

(英語教育専修 3 回生 澤井 咲樹)

◆ 自分で発展させたいこと

ESD は、持続可能な社会づくりの担い手となるよう、個々人を育成する教育であるが、特に人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むことや個々人が他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性の中で生きており、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むことが重要である。そのためには、私たち ESD ティーチャーを目指す学生や現職教員の方々が行っているような ESD 実践、ESD 演習など実際に体験する活動を行うことが効果的だと考えた。私が ESD ティーチャーになった際は、座学だけでなくこのような実践や演習などの肌で感じられる体験を多く取り入れていきたいと考える。

全ての SDGs のゴールは教育と関係しており、教育のあり方、やり方次第で SDGs の達成を左右するため、ESD には大きな役割があると再認識した。そのため、教師を目指す私たち、ESD ティーチャーを目指す私たちの役割は極めて尊く重いものであると改めて感じ、身が引き締まる思いでいる。

(書道教育専修 3 回生 八尾 有紗)

第3回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

・持続可能な社会の実現のために必要なこと

1、国際協力 2、技術革新 3、大企業や行政のトップダウン 4、市民参加・協力(ボトムアップ)
5、ESD 教育の役割。

学習指導要領に「持続可能な社会の創り手を育てる」ことが明記された。

・見方・考え方の育成について

学びに向かう力・人間性等は知識・技能を構造化する。構造化は、関係性をわかりやすく整理整頓し、「つながりの中で覚える！」ということである。

・アクティブラーニング～主体・対話・深い学び～

主体的な学びは切実感・必要感があるもの。

深い学びは子どもの変容や知識を得ると同時に感動があり、汎用性に富んでいるもの。

・ESD の2つの方向性

対話的で深い学びにより、「物事を吟味する」洗練された直感を育む。この直感はソマティック・マーカーであり、時代の変容や文化の合理性の標準に適應するものである。

(美術教育専修3回生 東 瑞)

◆ 自分で考えたこと

学習指導要領では、知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性の三つの柱を育むことを謳われているが、ESD ではその中でも学びに向かう力・人間性を重視している。「自分には何ができるのか」という志を育てることが問題解決に向かうためのステップなのだと考える。

主体的・対話的で深い学びを提供するためには、五感で感じ、学ぶことのできる体験型授業が実用的かつ効果的なのではないかと考える。

ソマティック・マーカーは生き残る確率を高めるために脳から信号が送られ、行動に移すことができる生き物の装置である。人間のソマティック・マーカー装置は他の動物とは異なり、後天的にも育てることが可能である。世界の状況に危機感を持ち、SDGs を達成しよう、世界をより良くしようという意識をもつためには、「危機感」が非常に重要なのではないかと考える。また、ソマティック・マーカー装置はクリティカル・シンキングと似たような側面があると感じる。言われたことをそのまま素直に受け取る力や共感力も大切ではあるが、批判的に物事を捉える力も現代において非常に重要な能力であると考えられる。そのため、様々な視点から様々なものに目を向け、ソマティック・マーカー装置を働かせたり、クリティカル・シンキングをしたりすることが大切だと言える。

(書道教育専修3回生 八尾 有紗)

第4回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

今回のセミナーでは、沖縄県伊平屋村立伊平屋中学校の高良直人先生が、前任校での ESD の実践事例を報告した。那覇市立松島中学校では、SDGs 研究指定校として、教科横断的なカリキュラムや「SDGs 新聞」「SDGs パスポート」などを活用し、生徒の主体的な学びを促進。環境保全活動や平和学習、地域文化体験を取り入れ、学びを深めた。那覇市の未来を考えるプログラムでは、企業や行政と連携し、生徒が地域課題への提案を行った。成果として、SDGs への理解が向上し、生徒の発言や態度に変化が見られた。一方で、新任教員との意識の違いや、授業参観者の少なさが課題となった。質疑応答では、ボランティア活動の決定方法や保護者の反応、生徒の学力向上などについて意見が交わされた。既存の活動を ESD 視点で再解釈することが、教員の意識改革につながることを示された。

(美術教育専修 3 回生 福原 望愛)

◆ 自分で考えたこと

優良実践の発表から学んだことは三つある。

一つ目は、ESD によって学校、教員、生徒が変わることだ。

生徒の成績が上がったこと、生徒指導案件が減ったこと、授業に積極的に参加する生徒が増えたことが特に印象的だった。教員の授業形態や活気が明らかに変わったというお話も衝撃的だった。ESD を実践することで子どもが変わるお話は聞いたことがあったが、学校や教員まで変わることは知らなかった。

二つ目は、ESD で取り扱えることは大変多いということだ。

2 年間の実践の中で、環境、伝統文化、キャリア、平和など幅広いテーマを取り扱っておられた。ESD と聞くと環境問題、防災、地域を連想してしまう自分がある。しかし、持続可能な社会の実現を達成するためのアプローチの仕方はたくさんあるため、伝統文化やキャリアなどもテーマとして扱うことができると気が付いた。また、従来の環境教育やキャリア教育といった〇〇教育も ESD の視点を加えることで、より実践に奥行きが出るのではないかと考えた。

三つ目は、工夫を凝らして学校全体で ESD を行うことの重要性だ。

高良先生は、これまで行ってきたものに ESD の視点を加えるだけ等教員の負担を増やさない工夫をされていたように感じた。新しいことを始めるにあたり、負担が増えることを懸念する人が多いだろう。もし、校内で ESD を中心となって進めるとしたら、懸念される事項とその解決策を考え、提案する力も必要だと考えた。

(社会科教育専修 3 回生 木幡 美幸)

◆ 自分で考えたこと

松島中学校の事例を聞いて、SDGs や ESD への理解・関心が生徒、教師ともに確実に高まっていると思った。ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成について共通理解が進んできたのではないかと感じた。SDGs カレンダー・マトリックスを利用し、一人ひとりの授業の中に ESD の視点になった学習指導で重視する能力・態度の育成を必ず盛り込んだことで、教師の ESD に対する意識が高まってきたのではないかと考える。このような事例を聞いたことで、今後単元構想案を作成していく中で、しっかりと参考にできる部分を取り入れ、SDGs や ESD について推進していけるような事例を検討していきたいと考える。

(英語教育専修 3 回生 澤井 咲樹)

◆ 自分で発展させたいこと

私の地元には八木節という民謡があるので、実践にあった旗頭のような実践ができればいいなと思った。奈良で就職すればそれこそ多くの伝統文化があると思うので、「他県出身だから」と嫌厭せず、積極的に学びに行きたい。質問の返答で「旗頭などの活動はもともとあったもので、そこに ESD と SDGs を関連付けた。自分の役割は甘え役で、いろいろな人に頼ったり、巻き込んだりしていった。」とあり、ESD や SDGs はやはりもともとある特色から始めるのかいいのかなと思った。人を頼る、巻き込んでいく力を持つ人とそれによっておこる活動のパワーは計り知れないと思う。私は何事も自分一人で抱え込みがちなので、そういった力を残りの大学生活で身に着けていきたい。

(音楽教育専修 3 回生 藤原 萌)

◆ 自分で発展させたいこと

SDGs 教育は、単に担任教師だけが取り組むのではなく、学校全体、地域、保護者が一体となることで効果を最大化できます。しかし、現場では教員ごとのモチベーションや価値観の違い、地域との連携の難しさなど、課題が多いのも事実です。

この実践例では、教師間の意識を統一するために、週 1 回の教科部会を設けたり、「一人一授業」で ESD 視点を取り入れることを推奨したりと、教師全体での共通理解を深めています。また、地域とのつながりを強化するために、地元企業との協働や伝統文化体験、地域清掃活動などを教育に組み込む工夫がなされています。さらに、SDGs 新聞を通じて保護者にも活動の様子を伝え、学校外からのサポートも引き出している点が特徴的です。

こうした取り組みの結果、教育に関わるすべての人が共通の目標を持ち、持続可能な社会の実現に向けて高い意識を保ち続けることに成功している好例といえます。

私も実践を行う時に授業内容だけではなく、授業に関わる全ての人の意識に目を向けた取り組みを行いたいと感じます。

(美術教育専修 3 回生 福原 望愛)

第5回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

単元構想案の相互検討①

マスター、スペシャリスト受講者の発表

(教職大学院 (M1) 福田 実莉)

◆ 自分で考えたこと

高良先生の発表では、地域の特性を生かした教育の実践で、島だからこそできる取り組みが印象的だった。特に、伝統文化の継承や地域と連携した授業作りがなされており、子どもたちだけでなく、地域の大人たちにとっても意義のあるものになっていると考えた。高校進学の際に子どもたちが不安を抱えていることに対しては、教師がその声を受け止め、挨拶運動という形で実際の行動につなげていた。不安をそのままにせず、実践を通して解決しようとする姿勢は、教育において非常に重要だと考える。

原田先生の発表では、ハザードマップを活用するなど、防災の学びが実生活に直結する点がよかった。地震の被害が小さい朱雀にすんでいるということから、自分ごと化するために旅行や校外学習で訪れる地域のリスクを知ることで、視野が広がり、防災への意識も高まるのではないかと考えた。

この二つの発表は、ただ知識を学ぶだけではなく、子どもたちが実際に行動に移すことが求められていた。高良先生の発表では地域とのつながり、原田先生の発表では防災意識という、社会と教育の接点が表示されていた。どちらも実践に基づいており、参考にしたいと考えた。

(国語教育専修3回生 無量井 夏音)

◆ 自分で考えたこと

民謡は、比較的現代的な言葉遣いの歌詞であり、現代の子どもたちに馴染みやすい。また、地域の自然や庶民の生活に根差した描写のため、地域の生徒も受け入れやすく、伝統音楽の欠点である「家庭的でない」や「格式が高く受け入れがたい」という点を克服している。能や朗詠そして吟詠にはない親しみやすさがあり、学びのとっかかりが得やすい題材であろう。

一方、吟詠は漢詩や和歌などを主に吟じ、その言葉遣いは奈良、平安、鎌倉、江戸時代といった現代に馴染みない雰囲気を持っている。よって、漢詩や和歌の要素を入れるのは適切ではないだろう。吟詠の中で唯一現代に馴染みのあるジャンルは俳句・俳諧である。松尾芭蕉や小林一茶の俳句はなじみがあり、子どもたちも簡単に句を読み、それを吟じることができる。

その俳句の親しみやすさを上手く取り入れた授業案を構想したい。

(美術教育専修3回生 東 端)

第6回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

単元構想に対して検討を行った。

駿河先生 吉野学習

中川先生 未来の環境のためにできること（四日市ぜんそく）

赤嶺先生 国づくりへの歩み

◆ 自分で発展させたいこと

中川先生の授業で、「日本の発展のために、石油コンビナートを作ることはどう思うか」という問いがあった。それに対して河野先生が「現代の私たちには結果がわかっているので、良い悪いどちらに転んでも批判の対象になる。子どもたちにとって苦しい問いになっている。」とおっしゃっていて、歴史の if を考えるうえで、最も難しい問題だと感じた。教師側も「みんなだったらどうする？」と聞いてしまいがちだし、子どもたちからも「僕/私だったらこうする」という意見は歴史に限らず出るものだと感じているので、子どもたちの学びを体験的に、自分事としてとらえさせつつも苦しまずに済む問とは、この公害の授業においては何なのだろうかと思った。

「赤嶺先生の授業でも歴史と SDGs を結びつけるにはどうすればいいか」といった話があったか、「当時の体験に近づけ、より身近に感じさせる。」という回答はあり、有効な手立てだが発問に注意しなければならない点において難易度の高い技術でもあると感じた。また、「今の世の中の課題に対してこの時代(学んでいる時代)から学べることを探す。」という案もあり、昔の問題に目を向けるばかりでなく、似たような事例があれば現代に置き換えても考えやすいのだなと思った。「歴史を学ぶ意義は過去の失敗から学ぶこと」ともいわれるくらいなので、当時に身を置いて「自分ならどうしたか」ではなく、現代に身を置いたうえで「自分ならどうするか」に置き換えると、ニュースや政治などに興味を持つきっかけにもなるかもしれないと考えた。

(音楽教育専修3回生 藤原 萌)

◆ 自分で発展させたいこと

山川先生 4年生社会科 「和紙作り 1300年も続いた秘密を探ろう」

奈良学園小学校の児童は将来の夢で弁護士や医師などを挙げる子どもが多く、金銭面での価値観を重視している。より多様な価値観を知って欲しいという願いから作った構想案である。「見つめる」の中で、五感で和紙と用紙のちがいを感じてもらう。用紙があるのになぜ和紙が必要なのか、どうやって作るのか、なぜ1300年も続いているのかななどの疑問を多く出させる。「調べる」では、手漉き和紙職人、福西さんの和紙作りに対する思いなど、調べ学習だけでは分からない部分に迫っていく。後継ぎがないことや和紙を必要としている人の減少という現実的な悩みを子どもたちに理解させる。「ふかめる」では、手漉き和紙の魅力を考えさせる。「ひろげる」では、実際に子どもたちに手漉き和紙づくりを体験させる。作った和紙に将来の夢や大切な人への思いなどを筆で書かせたりする。

(書道教育専修3回生 八尾 有紗)

◆自分で考えたこと

自身の単元構想について様々な指摘をいただいた。提出段階では、様々な災害について調べ、そこから災害の種類を絞ってそれぞれの備えに対して考えるというものであった。また、備えについて考えていく過程で京都市の防災についての問題を考えていくという構想を行っていた。検討が進む中で、大きく2つの事を今後意識して指導案作成をしていきたいと考えた。まず、目的の軸をぶらさないことである。防災について考えるといっても災害の幅は広く、発災前、避難時、発災後など様々な場面で考える必要がある。自身の単元では小学生第4学年を扱うため、焦点化して活動しなければ、調べるだけにとどまったり行動化する際に何をしたら良いか迷ってしまったり学びが深まらないと気が付いた。今後、目的を洪水が起こった際、自分の地域の人々が安全に避難できるようにするための活動に焦点を絞っていきたい。その目的を軸として、育成したい力や考えさせたいことについて効果的に指導できるように考えることが必要であると考えた。2つ目は、地域との連携を行う事である。児童自身が地域でフィールドワークを行い、地域貢献のために活動を考えることはできるが、地域で働く人にお話を聞くという事が重要であると分かった。児童にとって、ゲストティーチャーのお話を実際に聞くことで、地域の人々の思いを知り、自分たちが地域のために貢献することの意義を見出すのではないかと考えた。これらを意識して指導案を作成していきたいと考える。

(国語教育専修3回生 吉岡 優来)

◆自分で考えたこと

最も印象に残った単元構想案は、山口先生の「価値観をぶっこわせ」だ。実際に無くなればよいものを書き出し、それらが100年後、1000年後に無くなるかどうかを考えたときに一つも消すことができなかった。大学生であり、ESDを学習しているからこそその判断だったと思う。これは中学3年生だと、安易に消してしまう可能性が高いということが予想されて、考えさせられる良い授業だと思った。学ぶことの意義について問われる奥が深い授業で、私が生徒の時に受けておきたかったと思った。

◆自分で発展させたいこと

私自身が体験することによって、無知の怖さを学習できる良い教材であると思った。知識は判断の一番の材料となり、その判断が行動のもとになる。今回、私も無知であるからこそその大人として不適切な発言をした。この衝撃は一生残ると思うし、取り返しがつかない場合になることがある。児童・生徒に無知の怖さ、知ることの意義を知ってもらうことによって、自分事化し、自らが主体的に活動できるような児童・生徒を育てることができる。対話から様々な視点、価値観を知ることができるような実践を取り入れていきたいと思った。

(教職大学院(M1) 福田 実利)

第7回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

単元構想案の相互検討③（学生）

◆ 自分で考えたこと

今回、発表に対するご意見を頂戴して、児童生徒の目線になって考えることの難しさを感じた。私は井上有一の書を「書道に対する拒否感（正しく書のように端正に書かなければならないという思い込みからの逸脱）」のために用いようと考えた。理由としては、井上有一の書はダイナミックな書であり、端正な書ではなく、思い切り書かれているものが多いからだ。これらの作品を見ることで、思い切り書くことに対するハードルを下げる効果が見込めるのではないかと思っていた。しかし、ご意見の中には、取り組みにくくなるのではないかという意見もあった。自分ならこう思うという主観的な考えを持っていたために、思い込みが強く、疑うことができていなかった。

◆ 自分で発展させたいこと

今回のご意見を踏まえて、書道の面白さ、手書きの良さを伝えるために効果的となる教材を再検討したい。今ある考えとしては、井上有一のような近代的な書家の存在を提示することに加え、様々な書体、雰囲気を書いた作品を提示し、表現を工夫できること、思い切り書くことへのハードルを下げることを狙いたい。

（教職大学院（M1） 福田 実利）

◆ 自分で考えたこと

奈良県生駒市の中学校2年生に「防災」をテーマに総合的な学習の時間を展開すると考え、単元構想案を作成した。

先生方のアドバイスをいただく中で、地域の課題を認識し、それを解決するために活動したいのに地域の人の顔が見えない点、どの活動に重きを置くのか定まっていない点に単元構想案の課題があると整理することができた。

一点目に関して、「もし、〇〇だったら高齢者の方にとってそれはどう感じるだろう？」といった問いかけや生徒がその視点に気が付くようなデータや資料を用意することで課題を改善できるのではないかと考える。

二点目に関して、活動の重きが定まらなかったのは、やりたいことが多く欲張って活動を詰め込みすぎたからだと考える。授業を考える中で、生徒に一番伝えたいことは何か、それを伝えるために必要な手立ては何かと、もう一度考え直したいと思う。

（社会科教育専修3回生 木幡 美幸）

◆ 自分で発展させたいこと

「自分たちの町のごはん」

地元の伝統的な食材である榊塚味噌についての授業を作りたいと思い単元構想案を作成した。導入では、大豆が味噌に変わったり納豆に変わったりという説明文の3年生国語科教材である「すがたを変える大豆」や5年生からの家庭科の学習内容を把握することで「みつめる」のところで児童のつぶやきにバリエーションが生まれるのではないかと考えた。また、他の会社の味噌とのちがいを実感しないと、これからもこの食材を残したいという思いや大切さを感じられないと思うため、実際に児童が榊塚味噌を食べてみるという活動が必要なのだと学んだ。「ひろげる」では、子どもたちに地元の伝統的な食材を残していくために、そして榊塚味噌の魅力を伝えるためにPR動画の作成や味噌を使ったレシピを考えるなどの活動が考えられる。ひろげるターゲットを主婦層に絞ってはどうかというご意見もいただいた。野田味噌にしかない値打ち、価値を小さな手紙やカードなどにしてスーパーの味噌コーナーに並べるなどして、野田味噌を地元の人に買ってもらうなどの工夫をする活動もできる。どういうふうに情報を扱うか、どうしたらそのような方々に情報を届けることができるのかが大切になってくると感じた。一汁一菜、昔と今の味噌汁文化なども考えながら「3.すべての人に健康と福祉を」を大きなテーマとして進めていくこともできるというご意見もいただいた。そこから、速醸ではなく古来の伝統的方法である天然醸造を大切にしている榊塚味噌は健康においても良い効果が期待できるというところに繋がることができると考えた。郷土愛、伝統の大切さ、地産地消、発酵食品の持続可能性など様々な観点から学びの多い単元ができるように、いただいたご意見を参考にしながら練り直していこうと思う。もう少し時数があってもいいというご意見もいただいたため時数についても見直していきたい。

(書道教育専修3回生 八尾 有紗)

◆ 自分で考えたこと

私は方言について動画教材活用など教室で完結できる授業を考えたが、先生方のアドバイスにおいて、実際に地元民に話を聞くということで良さを知ることができるのではないかと意見をいただいた。動画教材はネイティブではないため、実際に生でネイティブが使っているところ、話し合い通じ合っているところを見て、本人たちから思いや感じることにについて話を聞くことで子供たちが良さを肌で感じられるということはとても大きいものなのだと考えさせられたし、外に出るということも教員の案によってできるということも考えさせられた。

◆ 自分で発展させたいこと

まず、子供達にどう行動変容して欲しいのかを考えてみようと思った。そこから、今回の先生方からいただいたアドバイスを元に教室の中から視野を広げつつ、前後の繋がりを考えて構想案を練り直し指導案作成に繋げていきたい。

(教職大学院(M1) 太田 遥)

第8回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

単元構想案の相互検討④

学習指導案の相互検討①

◆ 自分で考えたこと

才田さんの発表を聞いて、武庫川の良さ、課題について知るための手順として、保全活動をしている人にインタビューしたり、水質についての調査をしたりすることが有効なのではないかという意見が出た。私は、保全活動をしている人にインタビューをして、活動内容だけではなく、困っていること、課題についても生の声を聞くことで現実を知ることができるのではないかと思った。当たり前ではないことに気が付くための切り口は「昔の人のおかげで今の武庫川がある」ということだと思う。最後は、自分たちも未来のために何ができるのかを考えようというテーマにしても筋が通っていると思った。

◆ 自分で発展させたいこと

また、原田先生の学習指導案の発表を聞いて、自発的に考え、行動できるような児童生徒を育てたいという育てたい児童・生徒像を基に考えられており、この考えが主軸になることを改めて意識することができた。防災は命に関わる重要な項目である。「大人が助けてくれる」「大丈夫」というような漠然とした考えを持っている児童生徒は少なくないだろう。（実際に自分自身も防災についてあまり興味・関心がなかった）しかし、このままではいざ災害が起こったときに命を守ることができない。原田先生は、「どうしたら子どもたちの心に残るのか」ということに悩んでいらっしまった。育てたい児童・生徒の姿を原点回帰とし、考えていくことが重要だと考えた。

(教職大学院 (M1) 福田 実利)

◆ 自分で考えたこと

今回、特別支援学校の実践例を実際に聞くのは初めてで、とても貴重な機会だった。特に、地域と支援学級の結びつきが強い点が印象的であり、清掃活動を通して生徒が相手意識を育む良い経験になっていると感じた。阿部先生は活動範囲の拡大が難しいと課題を挙げていたが、無理に広げるのではなく、継続することが大切ではないかとも思った。長期的に続けることで、地域と学校のつながりがさらに深まり、より良い学びにつながるのではないだろうか。また、今回の活動は一種の就業体験的側面ももっており生徒達も今回の活動を通して自分の将来キャリアを考えるきっかけになったのではないかと考える。意見交換では、清掃活動のフィードバックを得ることが生徒の達成感につながる点や、活動範囲の拡大の難しさが課題として挙げられた。今後は、単なる技術習得に留まらず、相手意識を持って清掃活動に取り組めるよう支援することが求められる。特別支援教育における ESD の実践例として、地域貢献を通じた学びの深化が期待される。

(美術教育専修 3 回生 福原 望愛)

第9回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

今回は ZOOM を用いて、学生と現職の教師の方々が考えた SDGs 単元構想を検討した。

私は、奈良県橿原市の飛鳥川を教材に水質保全活動に取り組ませる単元構想を組んだ。水質保全の活動の一環としてボランティアで飛鳥川の清掃活動を行っているクリーンリバー飛鳥の清掃活動に参加させることで、協調性や責任感を育て、また体験をすることで達成感を感じることができる。今回の活動のゴールは生徒が授業の活動が終わっても自分が継続して水質保全の活動を続けたい、または続ける行動を起こすことだ。中澤先生をはじめ、現職の先生に指導、アドバイスをいただいた。

◆ 自分で考えたこと

指導内容について、活動の導入部分のインパクトが弱いという指摘と、川の清掃への参加が任意であるべきだという意見をいただいた。このフィードバックを受けて、私は活動の進行方法を見直し、より効果的な導入と柔軟な参加方式に修正することを決めた。まず、活動の導入に関して、確かに初めの段階で生徒の関心を引きつけることが重要である。そのため、飛鳥川の水質問題に関する具体的なデータや映像を使って、川の現状をリアルに伝える方法に変更した。例えば、川に生息する動植物の変化や、汚染がもたらす影響を具体的に示し、問題の深刻さを強調することで、生徒たちの意識を引き寄せることができると考えた。また、川の清掃活動への参加が任意であるべきだという意見を尊重し、生徒が無理なく参加できるようにするため、清掃活動は強制ではなく、参加したい生徒が自発的に選ぶ形に修正した。この方法であれば、参加者がより主体的に活動に取り組むことができ、その後も自発的に環境保全に取り組む姿勢を育むことができると思う。こうした修正を加えることで、生徒たちがより良い形で環境問題に関与し、持続的な行動を促進できる授業になると確信している。

◆ 自分で発展させたいこと

この活動のゴールは、生徒たちが授業終了後も自発的に水質保全活動を継続し、具体的な行動を起こすことを目指している。環境問題は一度の授業や活動だけで解決するものではなく、持続的な関心と取り組みが重要である。そのため、授業を通じて生徒が環境問題に対して強い関心を抱き、自分たちの力で何かを変えられると感じられるような体験を提供することが必要だと考えている。これにより、生徒たちは授業が終わっても自発的に行動を起こし、地域や社会で環境保全に貢献する意識を持ち続けることができるだろう。また、今回の活動の進行においては、中澤先生をはじめとする現職の教師の方々からの貴重な指導とアドバイスを受けることができた。それらから、授業構成や活動の進め方について多くの気づきを得ることができ、特に生徒がより主体的に参加できるようなアプローチが重要であることを学んだ。今後は、この実践的な学びを活かして、より多くの生徒が持続可能な社会に貢献できるような教育を提供していきたいと考えている。具体的には、環境問題への関心を深め、実際に行動を起こすための力を育てることに焦点を当てた授業や活動をさらに充実させ、学生たちが自ら社会の変革を担えるような学びの場を作りたいと思っている。

(美術教育専修 3 回生 福原 望愛)

◆自分で考えたこと

今回の学習指導案の多くが「伝統を引き継ぐ」という目標を掲げていた。地元の伝統工芸（和紙）を未来に残す、学校で長年取り組んできた取り組みを続ける、歴史ある祭りを未来に残す、島民が大事にしてきた魂を未来に残す、といった理念があった。検討会では、何度も「伝統を残すことの意味」について議論した。伝統を残すための授業をするのか、あるいは伝統を教材に取り上げて子どもたちの資質能力を育成するのか、それとも両方を伸ばすのか、様々な疑問が浮かんだ。伝統の継承について考える前に継承する必要性について考えておかなければならない。一般的に「伝統は継承しなければならない！」という固定概念があるが、伝統や文化が主体的に継承されるのは時代と協調し必要とされるからだ。よって、時代の変化に対応できず残したいという思いだけでは、継承の意味が形骸化してしまう。最近、歌舞伎役者の市川團十郎氏がTBSの「林修の初耳学」に出演し、伝統の継承について話していた。市川氏は、歌舞伎をプロジェクトマッピングや漫画コミックを取り上げた脚本で演じ、現代的にアレンジしている。時に印象に残ったのは、伝統の本質を残したまま時代に合わせて文化を変化させることは「文化を進化させること」になると力強く語っていたことだ。今回、検討した文化は、文化の形を変えずそのままを継承しようとしていた。しかし、文化を時代に合わせて変化させなければ、文化の隆盛はなく右肩下がりである。変化を加え進化させる必要があるかについて考え、それを課題にして解決する課題解決型の授業が望ましい。

(美術教育専修3回生 東 瑞)

◆自分で考えたこと

三好先生の指導案では、町探検後のどんなところが素敵かを考える時間について特に内容を詳しく聞いたり話し合ったりした。小学校1年であることから、子ども達が学習に取り組みやすい工夫がされていた。この時間の中心となる考える活動に入る前に、町探検で見えてきた場所の写真を使ってどこかを確認し、子ども達に馴染みのあるじゃんけんを組み合わせ、写真を使ってじゃんけんをするという活動をしていたところが興味を高める工夫の一つとして学びになった。学習内容にそのまま授業で取り組むのではなくて、遊びも取り入れることで興味を高めながら学習に取り組むという方法があることを覚えておきたいと思った。

高山先生の指導案では、観光の町として発展するにはどうすれば良いかを考える際に、王寺町は何世代にも渡ってその土地で住み続けている家族は少なく子どもたちのお父さん、お母さんが王寺町に住むことを決めて王寺町で暮らしている家族が多いという地域性に注目して、なぜお父さん、お母さんはそこで住むことに決めたのかという理由から王寺町の良さを探すという考え方が面白いと思った。先生がその学校のある地域について知っているからこそ、持つことのできる視点だと思うので、その地域のことを知っていることが大切だと改めて考えた。

(特別支援教育専修3回生 神吉 優利奈)

第10回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

第10回奈良 ESD 連続セミナーに参加した。テーマは「学習指導案の相互検討③」だった。

◆ 自分で考えたこと

自分が作った指導案を検討していただく中で、複数の目で指導案を検討する重要性について学んだ。同じ指導案でも、人によって気になる箇所は異なる。今回のセミナーでそれぞれの視点でのアドバイスをいただく中で、より授業構想に深みが出ることを感じた。また、教材と自分の距離感も適度に必要ではないかと考えた。一つのテーマを掘り下げ調べていく中で、徐々にその題材に愛着が生まれてくる。題材に対し、こだわりや願いを持つことは間違いではないと思う。しかし、教材研究を深める中で、自分がやりたい授業と目の前の子どもの実態は合っているのか等、冷静に立ち返ることも必要ではないかと考えた。今回のセミナーでアドバイスをいただく中で、テーマややり方にこだわるあまり、その視点がやや抜け落ちていたと気づいた。気持ちや願いだけでなく、冷静さも必要だと気が付く良い機会となった。

(社会科教育専修3回生 木幡 美幸)

◆ 自分で考えたこと

今回は自分の学習指導案について検討を行い、主に授業時数に関する指摘を受けた。私は全5時間で授業を構想していたが、内容が深く、問いの難易度が高いため、5時間では十分な時間が取れないのではないかという意見をもらった。特に、「どうすれば戦争がなくなるか」という問いは多角的な思考を要し、慎重に取り組まなければならない課題だ。しかし、この問いは難しいものの、触れずに済ますことができない非常に重要なテーマであるため、時間をしっかりと確保して深く考察する必要があるという助言を受けた。この経験から、問いの重要性に対して適切な時間配分を考えることの大切さを学んだ。

(国語教育専修3回生 無量井 夏音)

◆ 自分で考えたこと

自分で考えたこととして、最初の指導案では生徒の参加を任意にした点について少し考え直した。任意にすることで、生徒が自発的に取り組むことを期待したものの、環境問題への関心をしっかりと引き出し、全員が何かしらの形で参加するように促すべきだと思うようになった。そのため、活動の選択肢を広げることで、生徒が自分の興味に合った方法で関わりやすくすることが大切だと感じた。また、飛鳥川の清掃活動だけでなく、水質検査や生態系調査を取り入れることで、生徒たちにより実践的で多角的な視点を持たせることができると考えた。単に清掃するだけでなく、川の状態を科学的に把握したり、そこに住む生物を観察することを通じて、環境問題に対する理解が深まると感じた。さらに、これらの活動を通じて、生徒が自ら問題を発見し、解決に向けた行動を起こすことができるようにするためには、柔軟な対応が必要だということを改めて認識した。指導案が固定的でなく、状況に応じて改善していくことの重要性を感じ、その都度より良い方法を模索していく姿勢が大切だと思った。

(美術教育専修3回生 福原 望愛)

第11回奈良 ESD 連続セミナー

◆ 概要

指導案検討

ユネスコ新教育勧告

◆ 自分で考えたこと

島田さんの検討に対する先生方の発言で印象に残ったことがいくつかある。まず教師の思いを授業で伝えることの大切さだ。教師が伝えたいという思いを深めたり、軸をしっかり持ったりすることが大切だと感じた。その思いを伝えることを意識しながら授業を組み立てたいと考えた。また教師が良さや問題点の理解を深めることである。理解を深めることで、思いや軸も見えてきて、授業が深められると考えた。

最後にユネスコの新教育勧告についてである。先生方の意見で印象に残ったことは、教育は移り変っていているということである。時代が変わると共に、求められる教育も変わっていくため、それに合わせて学び続ける必要があると改めて感じた。また新たな言葉が出てきており、人間だけではなく更に地球のことを考える必要があると知った。ここで学んだ ESD を活用しながら今後の問題にも意識し、教育にも生かしていきたいと考えた。

(特別支援教育専修 3 回生 才田 優佳)

◆ 自分で考えたこと

前回の学習指導案の相互検討(学生)に参加できなかったため、今回発表させていただいた。グループごとではなく、参加者全員の前で発表したためすごく緊張したが、貴重な意見をたくさんいただいた。単元名は「生野区の空き家を減らそう」ということで、生野区の空き家の現状把握・改善に、地元の中学生にも興味関心を持ってもらい、地元を守っていく意識を高めてもらうことを目標とした。納得した意見の中に、「実践をしないのか」というものがあった。自分が考えた指導案では、調べ、インタビューし、改善案を構想し、地元の人にプレゼンして終わりだった。しかしこれでは、机上の空論となってしまうかねない。考えたことを実行し、実際に関わってみることでみえること、芽生える意思などがあるのではないかと言われ、すごくハッとさせられた。きっとこのままでは、将来的に生徒たちの記憶に残る授業にはならない。今まで記憶に残った授業とはなにか、大学の授業でも考えてきたのに、自分が記憶に残らない授業にしてしまうところだった。さらに、根本的なところである、「私はどうしたいか」という質問を受けた。自分自身に確固たる信念や思いがなければ生徒に響かず、学習内容も曖昧になってしまうという指摘は、私に深く突き刺さり、改めて考えるきっかけとなった。

(社会科教育専修 3 回生 島田 望希)

ESD としての教科教育実践

◆ 概要

ESD（持続可能な開発のための教育）について、国際連合、ユネスコ、我が国がどのように取り組んできたかを概説し、ESD について理解を深める。その上で、学校教育の教科において ESD がどのように実践されてきたかを実践者によって自らの実践を事例として解説する。また、全国の実践事例を解説する。自らが探究する専門分野と ESD とを関連付けて、互いにプレゼンテーションやディスカッションを行うこと通じて、ESD についての実践力を身につける。

◆ 自分で考えたこと

印象に残った授業は「ESD と家庭科」と、「太陽の塔を題材にした ESD 教材開発の検討」である。「ESD と家庭科」では、和服をお召しになっている美しい井坂教頭先生がご講演なされた。「和服の継承」をテーマとして、なぜ家庭科という科目があるのだろうか、和服は継承しないといけないのでしょうかといった発問から、児童生徒に考えさせるものであった。これは、私自身が行おうとしている芸術科書道の教育にも大きく関係するものだと考える。「道」という伝統的な文化を「継承していかなければならないのか」という発問をしたらどのような答えが返ってくるのだろうかと思いが膨らんだ。「太陽の塔を題材にした ESD 教材開発の検討」では、タイムリーな話題に合わせ、ただ単に展示会を鑑賞するのではなく、「どのような意図で作られているのか」という背景まで考えることによって、見える視点が変わると思う。この視点は、書道の作品の鑑賞の際に制作者の意図を考えるという箇所でも応用可能だと思った。

◆ 自分で発展させたいこと

今回この講義では様々なゲストティーチャーがご講演をしてくださった。多種多様であったが、共通して言えるのはゲストティーチャー自身が題材について面白いと思っていることがあげられる。また、日ごろからアンテナを張り巡らせて、題材となりそうなものを探しているという声もあった。このように、子どもたちのための授業だが、まずは自分自身が探求心を持ち、題材と向き合うことが大切だと思った。

(教職大学院 (M1) 福田 実利)

◆ 自分で考えたこと

どの先生の授業も、教料がバラバラで内容も個性あふれるものだった。ESD や SDGs に関連する授業はとてもバラエティに富んでいて、明確な型がないからこそ柔軟に行うことができるものなのだと思う。だからこそ子供たちの興味関心にしたがって自由に方向性を変えながら行うことができるし、取ることができるから手段もとても多いため、教員の腕が問われるが、子供たちが楽しさを感じながら学べる授業を作ることができる可能性が高いのではないかと考えた。

(教職大学院 (M1) 太田 遥)

成果発表会 子どもフォーラム

◆ 概要

2024年度成果発表会子どもフォーラムでは、小呂小学校・福住中学校・白浜中学校・老上中学校が参加しそれぞれの活動発表を行っていた。小呂小学校では、小呂島の紹介や「しまごはん」の販売についてや「平和が続けばいい」という児童が島を愛する思いを発表していた。福住小中学校では、ヤマトサンショウウオの保護やたい肥づくりや炭づくりについて発表していた。白浜中学校では白浜町の地域発展を目指すために「白浜がちゃ」を通して中学生たちが、試行錯誤しながら活動を行う様子を発表していた。老上中は「くさつプロジェクト」としてヨシと滋賀においての活動を紹介していた。

◆ 自分で考えたこと

特に印象に残った発表として、白浜中学校の発表である。今から「未来の白浜町」をするために中学生自身でできることを一生懸命に考え活動している様子が伝わり良い発表であったと考える。「白浜がちゃ」は地域との連携をすることでより地域への愛着や地域貢献の意識を向上させることができると考えた。また、「白浜がちゃ」を沢山のの人に知ってもらったり購入してもらったりするために中学生自身で工夫したり、企業の方に提案しに行ったりする様子が分かった。活動を行う上で失敗から試行錯誤してより良いものにしようとする中で、自分から行動する意識が向上し、また自分事として地域の課題に向かうことができると考えた。

(国語教育専修3回生 吉岡 優来)



1年間を振り返って

昨年度に引き続き、奈良教育大学での ESD 事業が積極的に行われました。ありがたいことに活動の数が増え、活動の幅も広がっていることで、学生は多くの貴重な経験を得ることができました。

私はこの1年で野外活動やあつまれ ECO キッズ！！などに参加させていただき、楽しく ESD を学ぶことができたと感じています。

(理科教育専修1回生 下田 愛結)

今年、ユネスコクラブは例年以上に増えた野外活動や新たな企画へ沢山挑戦しました。

その中で、学年を超えたコミュニケーションが多く生まれ、共に切磋琢磨した1年だったと言えるのではないのでしょうか。

(国語教育専修1回生 玉井 綾音)

次年度に向けて

次年度に向けて、より一層 ESD を学び、それに関する取り組みを行っていきたいと考えています。また、現役世代の方々や他団体との活動を通して、私たち自身の成長だけでなく ESD の発信にもより一層努めてまいります。そして、これからもセミナーへの積極的な参加や子供たち、地域の方々との交流を大切に、新たな取り組みへ進んでいきたいと思えます。

(書道教育専修2回生 間宮 千尋)

編集委員より

今年度も、ポートフォリオには数多くの報告がありましたが、中澤静男先生を中心に以下の4名の学生編集委員で掲載分を選出していきました。

家庭科教育専修2回生 安井 優美
書道教育専修2回生 間宮 千尋
理科教育専修1回生 下田 愛結
国語教育専修1回生 玉井 綾音

今回の報告書に掲載されているもの以外にもたくさんの報告があり、どれもこの1年間の ESD 演習・実践の活動での学びの深さを感じられ、私にとってもとても勉強になりました。私事ではありますが、今年度は ESD 実践に関わる機会が少なかったため、来年度は閲覧した報告書での学びを活かし、ESD・SDGs 活動に精進していきたく思います。

(家庭科教育専修3回生 安井 優美)

令和 6 年度 奈良教育大学 ESD 学生活動報告書

令和 7 年 3 月 31 日

国立大学法人奈良国立大学機構奈良教育大学

ESD・SDGs センター

〒630-8528 奈良市高畑町

TEL 0742-27-9367・FAX 0742-27-9147 (教育研究支援課)